No.2
2023/10/19

小野友道の　お節介な戯言

手洗いの神様ゼンメルワイス先生をご存じか

コロナ禍を経験してきた我々は、どの世代でも、どの職業をも問わず丁寧に手を洗う習慣が身についた。当たり前のように手を洗うこのことこそが細菌感染などから我々を防御する手段であることを明らかにしたのがゼンメルワイス(Dr. Ignaz Philipp Semmelweis, 1818~1865)先生なのである。ハンガリー生まれで、ウイーン大学医学部卒業後ウイーン総合病院で産科学および病理学を学んでいたが、産科病棟では多くの妊婦が産褥熱（日本では分娩後２４時間以降産褥１０日以内に２日以上38℃の発熱を来たした状態と定義）で亡くなくなるのを目の当たりにした。2棟ある産科病棟の第1病棟は医学生が、第2病棟は助産婦のための修練の場でもあっつた。しかしこの2つの病棟には他にも際立った違いがあった。それは産褥熱で亡くなる妊婦の頻度が第1病棟は2病棟の4倍もであった。このことは入院する妊婦たちも知っていて、「第1病棟から出して」「第2病棟へ転院させて」と叫んでいたという。ゼンメルワイス（S）先生はこの第1病棟で産科医として働き、となりの解剖室で産褥熱の解明のために懸命に病理医として亡くなった患者の解剖に当たっていた。医学生たちやもちろんS先生も皆、解剖の後、産科病棟に戻り産褥熱患者の診療に当たった。この際、S先生をはじめ、解剖後十分に手を洗うことなく、また解剖室から血液や膿が付着したままの作業衣姿で病棟に出入りし内診などをしていた。1840年代のことである。

人間の病気が細菌で起こることを初めて証明したのはコッホである。炭疽病の炭疽菌、コレラ菌を発見したのは1876年以降である。すなわちS先生のころは伝染する病気の原因が大気にあり、それに含まれるミアズマという不純なものによるとされていたのである。しかし、それでは第1病棟と第2病棟との差を説明できないと考えたS先生、過去の死亡率などを丹念に調べ、また友人の法医学教授が学生の解剖用ナイフで誤って指を怪我し、それが原因で敗血症で亡くなり、産褥熱と同じ症状ではと気が付いたS先生は「死体の何らかの未知の物質で汚染された」ものが原因であると確信した。しかしそれが細菌であろうとは想像だに出来なかった時代でのことある。この未知なる物質を払うためにS先生は医学生たちに手を爪の汚れも含めてブラシでよく洗うこと。その際にサラシ粉（塩化カルシウム）を用いること、内診のたびに塩素水で手洗い知ることを義務づけた。産褥熱は劇的に減少したが、しかし、医師たちはこれを受け入れず、あまつさえ上司である教授は自分の許可なしに手洗いを実行したことに激怒した。このようなことでS先生は失望の中ハンガリーへ帰国した。しかし、その処置の正しかったことは今日明白である。ゼンメルワイス先生をもっと知りたい方は『手洗いの疫学とゼンメルワイスの闘い』を紹介する。図書室に置いておく。